

シンポジウム

# マス・コミュニケーションと幼児保育

司会 山下俊郎

保育とラジオ・テレビ・絵本

お茶の水女子大学 波多野完治

ラジオ・テレビと幼児保育

保育理論の立場から  
お茶の水女子大学 坂元彦太郎

放送企画者の立場から

NHK教育局教養部 本野享一

保育者の立場から  
白金保育園 秋田美子

絵本と幼児保育

保育理論の立場から  
愛育研究所 竹田俊雄

編集者の立場から  
講談社絵本部 猪野賢一

保育者の立場から  
日の出学園幼稚科 土屋真砂子

保育とラジオ・テレビ・絵本

波多野講師

幼児保育とマス・コミュニケーションとの関係は、最近非常に問題になり、保育にラジオやテレビを利用することもだんだん盛んになってきた。また絵本は、前から利用しているが、最近では、これがほとんど副読本というような形にまで積極的に利用されるようになってきている。この問題を考えるには、幼児とマス・コミの関係というものをまず考えてみる必要があると思う。

このマス・コミュニケーションというものは、非常に強い薬のようなもので、良い面と悪い面を持っている。幼児に対しても良い面と悪い面とが作用するのであるが、その悪い面の作用が相当あるということが、だんだん一般に認められるようになり、これが幼児教育の方へはねかえって、それで幼児教育としては、その良い面を出るだけ利用するようにし、そのやり方によって悪い方をうまくコントロールしようということから幼児教育の方へ出てきたものと考えられる。

結論を一言すると、文化の問題は配給の問題であると考える。

文化の問題を生産の問題、配給の問題、消費の問題の三つの様相にわけて考えると、中心は配給の問題だと考える。幼児文化におい

てもやはり配給の問題が中心で、それをどのように処理するかということが大切である。それで、マス・コミの当然の性質として、これが大量に放出される。配給が非常に良くなった、これの典型的なものがテレビである。

テレビは、今までは映画というもので、特別な場所へ行かなければ見ることが出来なかったものが、家庭に入ってくるようになった。たとえばテレビ寄せというものは、寄せへ行かなければ見られなかったものが、家庭の中で寄せというものが見られるようになる、そこで問題になる。そこで配給の問題が中心になる。しかし、ここで幼児の問題として重要になってきたという理由の一つには、それは今まで主として体の事だけ考えられていた幼児観が、一般の社会の中に、最近ではパーソナリティ、人格の問題が大切だという認識が広がってきたので、マス・コミと幼児との関係が注目されるのだと思う。

一般の保育者は、昔からパーソナリティの問題、あるいは心理の問題が生理の問題と共に重要だということを知っていたが、一般の世の中は、なかなか認識しなかった。これがだんだんに認識され、特に精神分析の常識の普及から心理の問題の重要性がわかってきたので、マス・コミが家庭へ入ってくるという事と並んで重要となったのである。

今度は、良い内容を持ったものが一般に普及しないで悪い面ばかりが普及するということが起こってくる。幼児関係のプログラムで良いものが出てくるのであるが、悪いものの方からいろいろな影響を受けるといことが家庭でも起こってきている。また絵本などにおいても、良い絵本が出てくるのはあるが、そういうものが割合家庭に入らないで、ぞっき本というものが家庭に入ってくる。紙の

質の悪い、色の非常に悪い、ことはまたいへん粗雑なものが入ってくる、ということがある。

これが全部配給の問題で、生産されてもそれが家庭へ入らなければ問題はないのであるが、良いものの方が配給されないで、悪いものが配給されるという事から非常に大きな問題が起きてくる。

第三の問題は、おとなと子どもとの関連がある。家庭に入っていない場合に、おとなはおとなの文化を教授する所へ出て行けばよかった。寄せへ行くのはおとなだけであって、子どもは行かないでよかった。野球を見に行く場合は、野球の好きな人だけ行けばよい。

ところが家庭へ入ってくるとなると、おとなも子どももいっしょにある一つのものを把握するということになる。そこで、おとなと子どもとの関連、つまりおとなと子どもとの境がはっきりしなくなってきたということが起こってきた。これが絵本の場合には余り多くないが、テレビにおいては、いちぢるしく起こってきた。ラジオの場合もだいたいにおいて幼児番組は幼児が聞いて、それ以外のものは幼児が聞いてもおもしろくないので聞かぬ、ということになるが、テレビにおいて非常にやかましくなってきた。そこでいろいろな問題が児童心理学の方から起こってきたが、幼児の方にも同じ現象が見られ、おとなと子どもが同じプログラムを見ることが起こってきている。しかし、これは良い面もある。おとなと子どもが同じものを見るということにはいい面もあり、それも考え合わせなければならぬ。

第四の問題は、こういう家庭および社会における種々の変化を反映して、これを教育の面から改善し、あるいは個人、いき方の問題として社会の悪いものを出来るだけ排除して、良いものを自分の体の中、幼児の中へ取り入れていこうという反応が起こってきて、こ

れがいわゆる、幼児教育における視聴覚的方法という形で体系化され組織化されて、今日のように非常に盛んな状況が起きてきた、ということである。この問題は、視聴覚教育としての幼児教育であるが、内容のことが問題になる。この内容をどんなふうにするか、また、これをどんなふうにして一般の幼稚園や保育所の中へ行きわたらせるかということで、再び配給の問題になる。これは、前のところで考えねばならぬことであるので、ここでは結局カリキュラムの問題、保育カリキュラムと視聴覚的な方法との関連の問題というのが、非常に重要なテーマになってくる。私は、幼児教育は、この点では割合に恵まれていると思う。学校教育の問題であると、教科書があつて、これがカリキュラムを決定する重要な要素になる。ところが学校のカリキュラムは、教科書とラジオとが二つとも、カリキュラム内容が違うため、いろいろな点で不便があるが、幼児の場合には、教科書というものが別がないので、割合に保育カリキュラムとマス・コミ的なカリキュラムを調和させることが出来るのではないかと思つている。これについては他のかたがたからいろいろな御意見をうかがいたい。

### ラジオ・テレビと幼児保育

坂元講師（保育理論の立場から）

私に与えられた課題は、「ラジオ・テレビと幼児保育」であるが、だいたい大きな問題として二つあると思う。一つは波多野氏が発表されたように、ラジオやテレビ——マス・コミュニケーション——が、一般的に幼児生活にどんな影響をあたえているか、という問題を研究すること、他の一つは、ラジオ・テレビが幼児教育にど

ういう影響を与えているか、という問題を研究することである。

私は波多野氏の発表に関連づけて、第二の問題をとり上げる。すなわち、テレビ・ラジオによる教育が、実際に保育所や幼稚園でおこなわれている現状について、直接的にふれてみたいと思う。現在、世界中で日本ほどラジオ・テレビを保育所・幼稚園で使っているところはないと考えている。また国内においても、他の教育施設と比較した場合、幼稚園・保育所ほど使っているところはないと、判断される。どうしてこのような現象が生じたかは、簡単には言えない。その効果、影響ということもまた、軽々に論断することはできない。しかし、その事実に対して、仮説にすぎない自分の若干の解釈を試みたいと思う。

ラジオ・テレビが幼稚園・保育所に使われる理由、その功罪が何であれ、テレビ・ラジオは幼稚園・保育所に入りこんでしまつてゐる。したがつて、波多野氏が指摘された、幼稚園・保育所は子どもに対してどういうことを指導するか、どういう生活をさせるか——いわゆるカリキュラムの問題が重要な意義を持つてくる。

小学校以上の場合には、一種の固定した枠がある。しかし、われわれの場合には、ごく簡単な、例えば、幼稚園教育要領の類があるが、それは内容的な決定力を持つてはいない。したがつて、非常に使いやすく良いもの、本当に子どもの心身の発達のために良いものでありさえすれば、どんなものでも使つてもいいという、ごく簡単な理由が、まず第一にあげられる。しかし、それだけでは、これほどの隆盛期の説明にはならないと思う。

第二には、波多野氏の御指摘のように、ラジオ・テレビが視聴覚的な資料として使われているという問題である。

視聴覚的資料としての性格を十二分に發揮することが、幼児教育